

## 水の哲学

### 良寛

# 「山かげの 岩間をつたう苔水の かすかに我は すみわたるかも」

良寛は江戸時代後期の曹洞宗の僧侶。歌人、漢詩人、書家としても有名だ。

現在の新潟県三島郡出雲崎町に名主の長男として生まれ、名主見習いの身でありながら18歳のときに出家した。出家後は岡山県倉敷市・円通寺の国仙和尚に師事し、托鉢僧として諸国をめぐる。48歳になって故郷に戻り、簡素な草庵を移り住みながら晩年まで托鉢生活をつづけた。

### 物欲を超えて自由に生きる

良寛は戒律のきびしい禅宗の僧であるにもかかわらず気さくな人柄で人々に親しまれた。酒を飲み、煙草を吸い、難しい言葉をいっさい使わずに

仏法を説いた。いわば抜群の庶民感覚をそなえていたといっている。

とくに子供たちと遊ぶのが好きで懐にはいつも手毬が入っていたという。良寛は「子供の純真な心こそが誠の仏の心」として仏法の理想的な姿を子供たちの無邪気な笑顔のなかに見ていたのかもしれない。

生活は質素で74歳の生涯を終えるまで自分の寺をもたなかった。日々の暮らしはすべて托鉢で賄っていた。

托鉢は古代インド宗教における修行のひとつで信者の家をまわり、生きていくのに必要な最小限の食べ物を分け与えてもらう。まさにその日暮らしというべき究極のシンプル・ライフを生き抜くことが要求される。釈迦がみずから実践したように良寛も最後まで托鉢生活をまっとうした。

良寛の自由闊達な生きかたは物欲へのこだわりを制限する托鉢生活と密接に関係している。ひとは何かを所有すればするほど重い荷物を背負うことになる。所有するものが少なければ自然と足取りも軽くなる。良寛は托鉢を通じて果てしない物欲から解放された日々を過ごすことができた。物質的には貧しくても精神的には満たされた暮らしを軽やかに体現した。不況の時期になると良寛がクローズアップされるのはこうした生きかたへの一種のあこがれがあるからだ。



### みずからの思想と意志による清貧

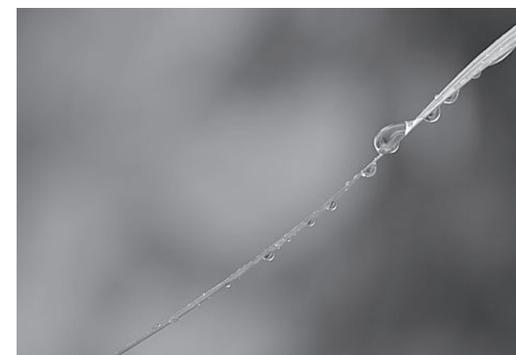
ドイツ文学者で作家の中野孝次はバブル経済が終焉しつつある1992年に発刊してベストセラーとなった『清貧の思想』で良寛、鴨長明、吉田兼好らの生きかたを「清貧」という伝統的な精神文化と解釈している。中野によると「清貧とはたんなる貧乏ではない。それはみずからの思想と意志によって積極的に作り出した簡潔な生の形態」ということになる。

中野が強調する「清貧」のポイントは所有するものを少なくするほど精神は自由になっていくということだ。いわば所有と自由は反比例の関係となる。良寛のように物質的なものへのこだわりを棄て去れば新たに増えてくるものもあるだろう。こうした精神文化は一部の文人たちに限らず一般庶民にも広く行き渡っていたという。

物質より精神を重視する「清貧」の思想はイギリスの思想家ジョン・スチュアート・ミルが構想した「定常社会」とつながるものがある。ミルは生産力が無制限に拡大した社会より自由や平等や人権を尊重する社会を理想的なものとして見做した。「清貧」を「未来の新しい生の原理となりうるもの」と説く中野も良寛の物欲に囚われない生きかたのなかに来たるべき社会のイメージを膨らませていたのかもしれない。

### 水のように澄みきった心境

「山かげの岩間をつたう苔水の かすかに我は



すみわたるかも」は故郷に戻って最初に暮らした燕市の五合庵で詠んだ歌で良寛のこだわりのない心境を率直に表現している。

この場合の「苔水の」は苔の生えた岩のあいだを伝い流れる清水のように——という意味になる。また「すみわたる」は「住み」と「澄み」という両義的な言葉を掛けあわせている。

山かげの苔の生えた岩のあいだを伝い流れる  
清らかな水のように  
わたしもひっそりと心を澄ませて生きている

歌人の斎藤茂吉は『良寛和歌集私鈔』で「この歌は良寛そのものを表現したもので、良寛歌集中の秀歌である」と高く評価している。

水は古来からこの世の諸行無常を象徴するものとして多くの文人たちに詠み継がれてきた。良寛もまた万物は流転するという儚さを誰よりも熟知していただろう。ただこの歌からは清流のように澄んで流れていたいという良寛ならではの透明な明るさを感じられる。(高倉)

### 参考文献

- 『良寛』 講談社
- 『良寛』 中央公論新社
- 『良寛さん』 新潮社
- 『良寛詩集』 岩波文庫
- 『良寛異聞』 河出文庫
- 『清貧の思想』 文春文庫